シンポジウムS2-3
当院における熱傷治療患者の高気圧療法の現状

宮庄浩司

福山市民病院　救命救急センター

はじめに

当院は2005年に救命救急センターを開設し，同時に第一種高気圧装置を導入した。第一種高気圧装置の制約上，呼吸，循環などに問題のある患者は，施行出来ないものの，救命救急センターの性格上，主に急性期に積極的に活用を模索してきた。熱傷治療においても，創面の早期の上皮化や植皮時の母床の改善を期待し積極的におこなっている。

【適応】

当院における熱傷患者の高気圧治療の適応は，原則的には①高齢又は小児②侵襲を最小限に抑えることが望ましい場合，③熱傷創面がDDBでⅢ度に移行する恐れのある場合，④植皮部の母床を改善⑤植皮術後のトワイライトな部位での生着を期待する場合などがあげられる。

【結果】(2005年5月30日～2010年6月2日まで)

当院におけるHBO施行回数は総計614回である。平均約100回/年程度であるが2005年度の173件から2006年度の49件までと各年度で差が大きい。症例の内訳としては一酸化炭素中毒24%，重症熱傷22%，突発性難聴20%蘇生後脳症2%などである。熱傷患者は2005年5月30日～2010年6月2日までに156例が当救命救急センターに搬入された。内訳は男性102名女性54名，平均45.歳。そのうち20例約13%にHBOを施行している。HBOを施行した年齢分布としては各年齢とも施行しているが，特に9歳以下と80歳以上が5例と多く，先に記した適応のように小児と高齢者でHBOを積極的におこなっている事がわかる。そのうち小児例の内訳は年齢0歳から9歳平均2.4歳　HBO施行回数は1回から14回　平均5.8回おこなっている。施行開始日は受傷当日から5日目まで平均3日目にHBOをおこなっている。これは家人特に母親に対する説明，受傷後の熱傷創面の傾向がわかり，悪化しつつあるか，改善しつつあるかの判断がつく時期と一致している。又HBO施行回数5.8日は約6回程度で熱傷創面の状態が改善またはほぼ治癒しており，また植皮が必要な状態では6回程度のHBOで母床が改善して植皮術へと移行しているとかんがえられる。小児以外の症例では20歳から91歳まで平均61歳でHBO施行回数は2回から29回までと幅があり，平均8.4回であった。HBO開始日においても受傷当日から95日目と大きく幅があった。又植皮術後におこなったHBOにおいても術後2日目から65日目までとおおきく幅があり，このことは成人が気道熱傷や，重症熱傷，合併症などの問題で，気道確保や，全身状態の安定が困難である場合が多く，更に植皮術が前提となる症例が殆どで，HBOよりも植皮術を優先していることがあげられる。

高齢者の植皮術では，植皮部よりもむしろ採皮部の治癒が遅い傾向があり，植皮術を避ける理由のひとつにあげられる。したがってなるべく植皮術をすることなく治療を行いたい思いがあり当院ではHBOを治療の選択枝のひとつに考えている。それとは対象的に小児の場合は植皮をおこなうことで，皮膚に瘢痕形成を起こすなど成長に伴う副次的な手術も加わってくることから，なるべく手術をおこなわずに治療を進めていきたいとの考えでHBOを治療のひとつに考えている。小児では第一種高気圧装置ではHBO，をおこなうことが困難と予測していたが，母親と一緒に入ること，母親と密着することで予測したような不隠，啼泣は無くむしろ加圧時間は眠っていることが多い状態であった。気圧に関しては適正な気圧は決まっておらず，小児では1.5気圧であまり体に負荷をかけないようにしておこなっているのが現状である。

【結語】

当院での熱傷患者のHBO施行状況を述べた。熱傷に対しては有効な治療法のひとつであり小児，高齢者に対してはなるべく植皮を回避するためにHBOをおこなってきた。成人に対しては，より早期に植皮をおこなうためにHBO開始が遅い傾向がある。